



## サイエンスアゴラでの日本沙漠学会によるブース出展と講演会開催 「地球の未来－日本からの提案II」：「日本沙漠学会からの提案と社会貢献」

日本沙漠学会および日本学術会議・風送大気物質問題分科会では、日本学術会議の推進および日本科学技術振興機構(JST)のバックアップのもと、日本科学未来館中心に科学技術・情報の社会への還元を目的にサイエンスアゴラが開催された。

全体では出展・講演会等210の企画が国際研究交流大学村の3会場で開催され、盛況でした。

「地球の未来－日本からの提案IIサイエンスアゴラ2009」の案内書によると、「サイエンスとあなたのコミュニケーション広場」を掲げている。その案内によると、「サイエンスアゴラは、“科学と社会をつなぐ”広場(アゴラ:ギリシャ語で人々が自由に集い論議する広場)となることを標榜し、2006年から始まりました。サイエンスに対して知りたいこと、考えたいこと、言いたいこと、訴えたいことがある一般市民から科学者・研究者まで、全ての方々に開かれた広場です。各地で活動するNPOや企業、公的機関、大学研究室などの団体や、ボランティア活動や研究を行う個人が、シンポジウム・ワークショップ・ショー・展示など多くの企画を出展します。あらゆる企画を通じて、サイエンスと、サイエンスが社会にもたらす影響やサイエンスにまつわる様々な問題について、共に考え、楽しむ双方向のコミュニケーションを行うイベントです。」

さて、日本沙漠学会では上述のとおり日本学術会議第二部(生命科学)農学委員会・風送大気物質問題分科会との共同主催でブース展示および講演会(シンポジウム)を下記の通り開催しました。

なお、著者は日本沙漠学会会長の立場と日本学術会議の農学委員会委員長・風送大気物質問題分科会委員長の立場を兼ねていて、責任を感じていましたが、ある程度社会への貢献、情報の還元は果たしたものだと思っています。その中で、参観者からは、「沙漠」と「砂漠」の意味についての質問が最も多かったことと、「日本に砂漠がないのに、なぜ沙漠学会があるの?」には、予想していた以上に、改めて驚きを感じるとともに、国民の皆さんの興味・疑問が鮮明になったように思いました。

### 1. 日本沙漠学会・日本学術会議風送大気物質問題分科会ブース展示

日時:2009年10月31日(土)～11月3日(火) 10:00-17:00

場所:日本科学未来館3F(東京お台場)

### 2. 講演会:「沙漠と沙漠化および黄砂と大気汚染のはなし」

主催:日本沙漠学会・日本学術会議 風送大気物質問題分科会

開催趣旨:主題「沙漠と沙漠化および黄砂と大気汚染のはなし」について、日本学術会議第2部農学委員会・風送大気物質問題分科会および日本沙漠学会の社会貢献の一環として、一般を対象として2課題のシンポジウムを開催しました。沙漠・沙漠化と地球温暖化、黄砂の特徴と地球規模のダスト輸送、気候変化とエネルギー、乾燥地における植林・緑化、中国新疆ウイグルの環境変動、沙漠における塩性化問題、沙漠緑化と人工降雨、沙漠植物と機能性植物、黄砂と付着物質・病原菌、

大気汚染による植物生体反応、沙漠・沙漠化の写真、地球温暖化と異常気象等々について、講演形式で解説しました。また、日本沙漠学会と風送大気物質問題分科会の活動状況をブースにおけるポスター、写真パネル等の展示で紹介しました。



日本科学未来館3Fにおけるポスター、写真パネル等の展示

### (1)「世界の沙漠と環境のはなし－沙漠・温暖化・環境問題・人工降雨等－」シンポジウム

日時:10月31日(土) 13:00-16:00

場所:産業技術総合研究所本館(臨海副都心センター)会議室1

- (1) 風送大気物質問題分科会と日本沙漠学会の社会貢献  
(筑波大学:真木太一)
- (2) 沙漠と地球温暖化－気候とエネルギー－  
(成蹊大学:小島紀徳)
- (3) 中国新疆ウイグルの環境変動  
(千葉大学:石山 隆)
- (4) 中国新疆ウイグルのオアシスの塩類集積  
(宇宙技術開発(株):伊東明彦)
- (5) 沙漠の自然・砂丘の写真と沙漠化防止目的の人工降雨  
(筑波大学:真木太一)



産業技術総合研究所会議室における講演会(真木会長)

# NEWSLETTER

## The Japanese Association for Arid Land Studies

### (2)「世界の沙漠と沙漠化のはなしー植林・生物資源・黄砂・大気汚染等ー」シンポジウム

日時:11月3日(火) 13:00~16:00

場所:東京国際交流館メディアホール(国際交流会場)

- (1) 乾燥地生物資源の機能性と有効利用(筑波大学:磯田博子)
- (2) 乾燥地植林ー炭素固定のためのー(成蹊大学:小島紀徳)
- (3) 日本と中国の黄砂および黄砂付着物質・病原菌(筑波大学:真木太一)
- (4) 最近の大気汚染による植物への影響変化(東京農工大学:青木正敏)
- (5) 地球温暖化と最近の台風・豪雨・黄砂等の特徴(筑波大学:真木太一)

さて、昨年、参加者は全体で6000名とのことで、沙漠学会でも多くが期待できるものと思われました。今年の沙漠学会の4日間の展示会場には、1日目の10月31日(土):約150名、2日目の11月1日(日):約250名、3日目の2日(月):約120名、4日目の3日(火)文化の日:約280名であり、トータル約800名であった。ただし、これには小中学生程度以下の子供は含まれていません。

一方、講演会には参加者が少なく、10月31日:約20名、11月3日:約40名でした。しかしまあ、沙漠学会の宣伝にはなったかと思えます。さて、何人、入会するでしょうか。目論見が外れたでしょうか。短期的ではなく、将来に向けて予測が外れないことを期待しています。



東京国際交流館メディアホールにおける講演会(小島理事)

ところで、その展示会場は、実はカタツムリのような曲線で、傾斜のあるユニークな回廊であり、奥まった場所の手すりのある車いすでも通るような通路で、その両横に写真パネル56枚(真木)とA0版のポスター6枚(石山)を設定しました。さらには沙漠関連、黄砂関連の書籍・資料を展示するとともに、沙漠学会としては、期待していた入会案内をA4封筒にセットして、待ち構えました。しかし、10月31日は開始が10時でしたが、9時前から設定にかかり、何とか10時半には終了しましたが、とにかく大慌てで、写真パネルの順の選定など全くできないまま、仮の配置ということになってしまいました。もちろん、その後、設定し直しなどできるはずもなく、そのままとなり、わずかにゆがみや不安定なネールを固定する程度でした。そして、10月31日の13時から講演会が開

催されるので、12時には、科学未来館からすると裏側になる産業技術総合研究所本館の会場に移りましたが、なんと前の講演会が12時40分まで居座っている状況で、その後慌てて準備しました。しかし、準備は終わったところで、あまりにも人が少ないことが分かり、拍子抜けでした。考えてみますと、本会場からは裏のしかも3階の奥まった分りづらい単なる会議室であり、そのようなところにメイン会場から訪ねて来る人は極めて少なく、目的を持った人と関係者のみで約20名と極めて寂しい限りでした。学会内でも宣伝が足りなかったようで、反省する必要性を感じました。しかし、講演は予定通り行われ、学会の状況および学術会議の説明と分科会の任務等々が熱っぽく報告・解説されました。



東京国際交流館メディアホールにおける講演会(磯田理事)

一方、11月3日の講演会の方は、東京国際交流館メディアホールで、素晴らしい会場でしたが、まあ何とか本会場の向かい側でもあり、ある程度集まりました。最初は少なかったのですが、終わり頃の4・5題目の講演時間の頃には、ある程度、観衆が増え、質問も多く出たり、時間切れで打ち切りとしたりで、ちぐはぐな感じでした。しかし、沖縄・琉球大からの参加者もあり、少ないながらも嬉しく感じました。なお、反省材料が鮮明になりました。

ところで、来年はとなると、今回の初めての経験を活かして、実施する必要があるかと思えます。特に講演会は別のこととして、1講演会にするとか、沙漠学会の秋季ミニシンポジウムにするとか、特に展示は、コ字型の本来のブースを広めに割り振ってもらって、そこでの講演会的なもの、ワークショップ(事務局の定義)が適当であると思えます。

良い経験になりました。それなりに成果があったとして、来年実施するかどうかも検討することとして、もし実施するにしても、やり方の改善を行う必要があるように痛感しました。最後に付け加えれば、開催場所・形式は日本科学未来館のメイン会場の1階でのワークショップ形式が最適であると思えます。

最後に、お忙しい中、全面的にご協力いただきました石山副会長、篠田財務理事、西崎会員および講演いただいた小島理事、石山副会長、磯田理事、青木会員、伊東会員に、また参加いただきました関係者の方々に心より御礼申し上げます。

(文責 筑波大学北アフリカ研究センター 真木太一)